

自己意識の変容
- トランスパーソナル心理療法の理論と実践について -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
石垣 美幸

個人と環境は互いに影響を与えあい、世界を構成している。では、現代社会のさまざまな問題に対して、私たちは何ができるのか。過去と他人は容易に変えられない。変えられるのは、今の私とこれからの私である。しかし、私は、私自身を知っているのだろうか。私の受け取り方や想いが私の言動を生み、他者や環境に影響を及ぼしている。また私は、他者や環境から影響を受ける。

人間は、自分以外の他の誰にもなれない。自分を生きることしかできないのである。では、私とは何者なのか。私は世界をどのように見ているのか。本論文では、人間本来の存在を追求し、社会を構成する人間の意識の変容について考察する。「変容」の概念には、トランスパーソナルな方向へむけての開放的变化が含意されている。

第1章では、意識を構造的・階層的に解釈したケン・ウィルバーの「意識のスペクトル理論」と、自我と力動的基盤の相互作用に注目する、マイケル・ウォシュバーンの「力動 弁証法的パラダイム」について論じる。

第2章では、ウォシュバーンによる「力動 弁証法的パラダイム」の中から、自己性の展開について取り上げて述べる。原抑圧から「退行 脱抑圧 再生」にいたる過程では、どのようなことが起こるのか。そこでは、何を失い、何を得るのかについて論じる。

第3章では、ウォシュバーンの理論に沿って、そのひとつのケーススタディとして、筆者の幼少時から、セラピストとしての現在にいたるまでの「自己意識の変容」について記述する。

第4章では、「苦しみ」について考察し、意識の変容における成長への可能性と、精神病化との分岐点がどこにあるのかを問う。その際、ウィルバーのいう「超個的目撃者」がどのように役に立つのかを吟味する。さらに、セラピストの意識状態の視点からカール・ロジャーズのいう6条件について考察する。最後に、トランスパーソナル心理療法は、個人の意識変容にどのように貢献できるのかについて、その可能性を論じる。